

シリーズ「肺がん」②

「肺がんの薬」免疫チェックポイント阻害薬

独立行政法人国立病院機構 和歌山病院

薬剤部 松本 信彦

今回は、肺がんの治療薬の中で最近テレビでも特集された免疫チェックポイント阻害薬についてお話をさせて頂きます。

免疫チェックポイント阻害薬として、商品名「オプジーボ®」や「キイトルータ®」があります。が、今までの抗がん剤と何が違うのでしょうか？

抗がん剤は、がん細胞の異常な増殖をさまざまな手段によって食い止めます。しかし、がん細胞だけでなく正常な細胞の増殖にも働きかけるため副作用が引き起こされてしまいます。

免疫チェックポイント阻害薬を使ったがん免疫療法は、お薬が直接がん細胞を攻撃するものではなく、人間がもっている生体内で異物からの防御を行う「免疫」を利用した治療法です。

免疫は、自分(自己)と自分ではないもの(非自己)を見分けるところから始まります。体には免疫を担当する専門の細胞があります。免疫担当細胞の一つであるT細胞は、

質性肺炎や下痢、内分泌障害等の突発的な免疫関連の副作用が発現することが知られています。これらの副作用を未然に防止、また重症化させないためにも、副作用症状についてよく理解して、症状があればすぐに医療機関に受診するなどの対応が重要です。

免疫チェックポイント阻害薬については、厚生労働省から適正に使用することが求められ、使用出来る病院や、特定の基準を満たす患者さんが使用できるようになっています。適正使用ガイドラインでは、気管支鏡検査から肺の癌組織を採取して「PD-L1」の発現率を確認し、キイトルータ®については「PD-L1」の発現が、一次治療では50%以上、二次治療では1%以上の発現がないと使用できません。また、オプジーボ®についても、「PD-L1

1」検査を行い、1%以上の発現がある患者さんが対象となります。和歌山病院は、呼吸器専門病院として免疫チェックポイント阻害薬を使用できる病院です。肺がんは、早期発見、早期治療が必要です。気になることがありましたら、気軽に病院へお越し下さい。

従来のプラチナ製剤を利用した抗がん剤治療で、多く見られていた吐き気やしびれなどの副作用は、免疫チェックポイント阻害薬では少なくなり、早期から外来で治療が行えるようになりました。従来の治療法での副作用と異なり、免疫にブレーキがかからなくなる事で発現する副作用で間